



教会短信

2011年2月13日

No. 37

牧師 間瀬 善彦

「天の国は次のようにたとえられる。畑に宝が隠されている。見つけた人は、そのまま隠しておき、喜びながら帰り、持ち物をすっかり売り払って、その畑を買う」(マタイによる福音書 13:44)。

聖書の中には「天の国」のたとえ話がたくさんあります。天の国とは、神様のいらっしゃる国のことです。当時の人びとは、神は天におられると単純に信じていましたので、神の国のことを、天の国と表現したのです。上のマタイ 13:44 は、天の国のたとえ話です。宝といっても金銀、お金とは限りません。人にはそれぞれ大切にしている宝物があると思います。それは、家族であったり、何かの物であったりするでしょう。その人にとっての宝は、何ものにも代えがたいのです。宝とを感じるものは、いくらでも自分が持っていたいもの、またいくらでも欲しくなるものです。

「なんでも鑑定団」という番組があって、いろいろな珍しい骨董品が出品されて大変おもしろく感じています。人によっては全く興味を感じないものでも、興味がある収集家にとっては大金を出してでも手に入れたいものようです。人にはゴミ同然のものでも、収集家にとっては何ものにも代えがたい宝物なのです。

私は20代の頃、古本屋でキリスト教関係の良書を探していた時、ある全集を見つけました。それはすでに絶版の全集でしたので、その本に出会えてとても喜びを感じました。しかし、友人もその本を探しているのを知っていたので、一刻も早く買わなければと、翌日お金を用意して買いに行きました。その頃の私にとっては大金でしたが、何とかお金のやり繰りをつけて購入しました。後から聞いた話ですと、友人もその全集を見つけて買うつもりだったということがわかり、多くの苦言を言われてしまいました。その後、友人との関係は好きな作家の本を1冊贈呈して、何とか仲直りしてもらいました。宝を見つけると、人は、他の物売り払ってでも手に入れたいと思うようです。

それでは、天の国では、神の宝とはいったい何でしょうか。神は「あなたは宝の民」である(申命記 26:18)、わたしたちを宝の民と呼んでくださいます。神は1人ひとりを宝物のように大切に思い、心から愛してくださっているのです。人の救いのため、ご自分の御子イエスの命を惜しまず、わたしたちの罪の贖いのために献げ尽くしてくださいました。イエス・キリストを救い主と信じる者は救われるのです。そのことが、神がわたしたちを宝の民にくださったということなのです。

イエス様を知ることになってわかったこと

私が2005年の12月にこの教会に通い始め、2006年の8月に洗礼を受け、約5年過ぎた。また、大学時代に経堂の町に初めて立ち寄ってからすでに十数年が過ぎた。この間、経堂も、駅が高架になったりはしたが、雰囲気はそれほど目に見えて大きく変わってない。でも店や周りの光景は少しずつ変わっているし、駅前も変わった。

何を言いたいのかといえば、私の信仰もそれに似ているものがあることだ。私はイエス様を救い主と信じ、洗礼を受けクリスチャンになったが、何かが劇的に変わったわけではない。また日曜日は毎週教会に通うとはいえ熱心な信者とも言えない。しかし着実に良い方向に変えられていることは確かであるとはっきりと言える。

まずは、物事をより深く、幅広く考えるようになったということである。聖書を読み、考える上ではたくさんの捉え方もある。特にプロテスタントの教会は聖書中心であり、その中でもバプテストの場合は教会の自主性も重視されている。牧師と信徒の間でも意見が違う事もある。信徒の間ではなおさらだ。幸い私たちの教会では、礼拝後教会学校があり、毎回必ず聖書や礼拝での個所についての意見交換や質問の時間がある。言うべきことが見当たらない、良くわからない時もあるが、発言の順番は教会員の場合、基本的に必ず回るため、発言に備えて聖書や説教について能動的に考えるようになった。思考力の面で非常に役に立っている。そして違う意見や考えを聞き聖書の考え方も文字通りでなく、何を言わんとしているのか、言外の意味を今まで以上に深く読むことができるようになってきた。それは見えないものの大切さである。聖書に、「私たちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます」(第二コリント 4:18) とある。私にとって、教会は最大の頭の鍛錬の場所であり、心を静める場所になっているのも事実だ。

二つ目に、結論を急がなくなったことである。現代社会では効率や早めの結論が重視される中で、不利益ではと思う人もいるだろうが、そうは思わない。聖書を読むことで、見えない物や相手の事をじっくり考え、知るということに役に立っている。すぐに結論を出さなくなる分、幅広い目で物事を見ることができ精神的な面で幅ができたと思うからである。心の余裕も少しは出てきたと思う。個人的な話だが、職場で大切にいただいた方が人事異動でいなくなり、涙の出る思いをした。だがまた、新たに素晴らしい方に出会い、一層強く仕事面でも生活面でも恵みを得ることになった。後で考えればこの恵みも人事異動がなければ無かつたらろう。まさに「神はすべてを時宜にかなうように造り、また永遠を思う人に心を与えられる」(コヘレト 3:11) というように、神の業は、楽しいことも苦しかったこともやはり時宜にかなっていると思えるようになった。結果として不安を乗り越える大きな希望にもなった。

信仰生活5年間を経て得たものは、真の自由とは何か、自由の中で自らを律することを強制ではなく自発的に深く考えることができた事だと思う。

K. T.

マザー・テレサ

最後に南アメリカの
ベネズエラを訪れた時のことは
いつまでも忘れないでしょう。
あるお金持ちの家族が、
子どもたちの家を建てるための土地を
シスターたちに下さったので、
私はお礼に伺いました。
そこで私は、家族のいちばん上の子が
重度の身体障害をもっていることを知りました。
私はその子の母親に尋ねました。
「お子さんのお名前は？」
彼女は答えました。
「愛の先生です。
この子はいつでも私たちに
どのように愛を行いに表すかを
教えてくれているからです」
その顔には、美しいほほえみがありました。
「愛の先生」！
重い障害のあるあの子を
こう呼んでいるのですよ！

(『マザー・テレサ日々の言葉』女子パウロ会) より引用

教会にいらっしゃいませんか

- ・ 聖書は、人々が幸いな生き方をするために与えられた、神様からの手紙です。
- ・ 困難の中にいる人、生きがいを求めている人も希望のある人生に変えられます。